



Title	宇治拾遺物語における二重性と起点
Author(s)	野本, 東生
Citation	国語国文研究, 149, 1-13
Issue Date	2016-10-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89774
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_149_01-13.pdf



宇治拾遺物語における二重性と起点

野 本 東 生

一、はじめに

比叡山に在る稚児がうたたねをしていると、僧たちが、「かいもちひ」を用意し始める。できあがって、いざ稚児を誘おうと声をかけるのだが、稚児の方では、すぐに返事をしては自分の心待ちにしていた気持ちが見抜かれてしまうと、思つて恥じらい、もう一度呼ばれてからおもむろに起き上がろうと考える。けれども、予想外にも僧たちは、寝ている子供を起こしてはまずいというセリフを残して、「かいもちひ」を「ひしひし」と食べ始める。しばらくは待つていた稚児もついには我慢しきれず、「無期の後」に一人で「はい」と答え、お堂は大笑いに包まれる。『宇治拾遺物語』(以下『宇治拾遺』)に収まる有名な「児の空寝」の概要である。

すでにこのまとめ方の中に、ある種の誘導が潜むであろうが、この話は、「かいもちひ」をめぐる稚児のささやかな羞恥心とささやか

な欲求の葛藤が微笑ましく描かれるものと捉えられる。ところが一方で、この話は、僧の「ひしひし」というあからさまな音、いつせいに笑い出す僧たちの眼差しの先などから、稚児の心理的葛藤の話として読むのではなく、稚児の様子に気づきつつ僧たちが稚児の様子を面白おかしく見守る話として読むべきだという見解もある¹⁾。この話単独についての第一印象で言えば、稚児が返事をする「無期の後」という時間認識表現は、稚児にとつて気の遠くなるくらいに待たされる時間が長かったということだろうし、その視点を引き継いで全体としては稚児の話としてしか受け止めにくい。けれども前者のような解釈・把握にも一理あるように思われる。これを多様な受け止め方だとして受け手・読み手の問題と片付けてしまつてよいのだろうか。

いま先だつて、解釈が二重になつて決しにくい例を挙げるなら、『宇治拾遺』第一二話「歌詠被免罪事」がある²⁾。大隅守は、現地の郡司の職務怠慢に対して罰を与えようとするが、姿を現した郡司の

老体ぶりを目の当たりにして、許そうと考えた末、和歌でも詠めないかと水を向けることになる。すると郡司は見事に和歌を詠んで、罰をうけることがなかったという話である。この話は巧妙な和歌を詠むことで郡司が利益すなわち免罪を勝ち取った歌徳説話とひとまじり把握できる。「情けはあるべし」、すなわち、人は和歌を詠めるような「情け」、もの情趣をわかる心を持ち合わせているべきなのだ、という話末評語もその理解を支持する。一方で、末尾の「いみじう感じて許しけり」も含めて、主体はすべて大隅守で描かれる。つまり、話の枠組みとしては歌徳説話、すなわち郡司が許された話であるものの、これを支える表現は結果として大隅守が許す話になっているということである。もちろん、こうした枠組みと表現のズレという問題は、説話集全般を見渡して必ずしも珍しくはない。とはいえ、話末評語に戻れば、「人はいかにも情けはあるべし」という「情け」は、大隅守の郡司を許そうという気持ちにも対応してくる。なぜならこの話を動かしたのは、大隅守の「情け」、温情であるからだ。こうしてみると、一見、意味決定の迷路から抜け出せなくなりそうである。和歌を詠める力を指示するには「情け」は迂遠な表現であるし、当為として温情を強調するには因果関係が弱いし、どちらの意味に決定するにも多少の屈折を経なければ成立しない。歌徳説話という第一の枠組みが揺さぶられ、進行上の表現とともに温情説話としての第二の解釈が立ち上がってくる。

本稿では連想・連結と結語を軸にしてこの解釈の枝分かれを『宇治拾遺』の仕組みとして考えてみたい。

二、評語の二重性

如上の問題点に照らして、まず確認すべき点を本節では押さえておきたい。前節に挙げた第一一話の二重性を受け手のみの問題と片付けることは難しい。解釈決定に際してのいささかの曖昧さを、教訓的なことば、一義的に伝えたいはずの部分に残すことに大いに問題があり、なおかつ『宇治拾遺』における多様な言語遊戯の存在からそれを表現上の未熟さとして考えにくいからである。どの「誰の「情け」か曖昧では教訓が伝わらない。この二重性の発生がその際に話の結びである話末評語を起点としていることを問題にしたい。『今昔物語集』や『古本説話集』と同文のこの話は、潜在的に二重性を抱えていたということにもなるが、別の見方では、それを『宇治拾遺』は話末評語を一つ挟むだけで、重層化してみせるのである。これを評語の作為性と受け止めて、そのように認められる事例を挙げておこう。

第一六五話「夢買人事」を挙げる。夢解きの女のもとで備中守が吉夢と夢合わせされた一部始終を「まき人」が盗み聞きする。女を脅して、吉夢を横取りした「まき人」は、その後成功して渡唐後は帝に重用された一方で、備中守長男は無官で生涯を終えたという。左はこの一話の最後の部分に当たる。

その後、文を習ひ読みたれば、ただ通りに通て、才ある人になりぬ。おほやけ聞こし召して、心みらるるに、まことに才

深くありければ、唐土へ「物よくよく習へ」とつつかはして、久しく唐土にありて、さまざまの事も習ひ伝へて帰りたりければ、帝、かしこき物におぼしめして、次第になし上げ給ひて、大臣までになされにけり。

^Aされば、夢取ることはげにかしこき事なり。

かの夢取られたりし備中守の子は、司もなき物にてやみにけり。夢をとられざらましかば、大臣までもなりなまし。^Bされば、夢を人に聞かすまじきなりといひ伝へたり。

波線部Aは、大半の注釈書では、「かしこし」が「おそろしい・そらおそろしいことだ」となっている。⁶改段を施してまとめた場合、A以後が一段落としてまとめられることも多い。その一群では確かに夢を取られた備中守の息子の哀れな行く末が記されており、「恐ろしい」という理解はこの内容と呼応するものと言える。「他人が自分のあるいは別人の夢を取ることは恐ろしいことだ」ということだから、夢を取られた話ということになるか、あるいは「夢取る」ことの恐るべき力を指していると考えてもよいだろう。

けれども右のようにこの改段をずらして評語の覆う枠取りをいささか変更させてみると、ここまで語られていた行動主体、「まき人」の話としても把握できるはずである。第一六五話に関しては、注釈書などでも関連する事例として再三指摘のある平仮名本「置我物語」巻四の中に、北条政子が妹から吉夢を直接買ひ取ることに成功し、繁栄をつかむ逸話がある。そこでは妹の見た不思議な夢を判断する際に、「さてもこの二十一の君、女性ながら、才覚人にすぐれしかば、

かやうの事をおもひいだしけるにや」と過去の夢の前例に思い当たって、その才覚が評価される。つまり、夢を取る側がうまく立ち回るといふ把握がそこにはある。単純な比較は難しいが、Aの評語はまさしくこの把握に重なるものである。「されば」という因果関係を導く接続詞が、直前の文脈をうけると考えれば、帝が「まき人」を評して「かしこし」と認定しているのである。その取る側に「かしこさ」（巧妙さ・機転）が要求されるものと考えられることもできるわけである。

くわえて一点、末尾のB、二つ目の話末評語を見てみると、「されば人に夢を聞かすまじきなり」という言い伝えが紹介される。数ある夢合わせの中では、他人に対して夢を語ることの危険性を訴えることばがしばしば含まれるが、これもその同列に並ぶものと言える。本文に対応させれば、「人」とは具体的には「まき人」を指すものと思われる。けれども、北条政子の逸話とは違い、「まき人」が夢を横取りするためには、夢解きの女が欠かせない。じつは、夢解きの女は共犯関係になる存在としても浮かんでくる。女の判断のいきさつはともかくも、「あなかしこあなかしこ、人に語り給ふな」と備中守の息子に他言をはばかるよう注意したはずの女が、すぐ後で「まき人」の横取りに実質的に荷担している。こうした理解とBの評語を重ねてみれば、女に夢を聞かせていたが、同時に「まき人」に夢を盗み聞きされていたということになる。つまり、Bの話末評語は、夢をむやみに人に語ってはいけないう教訓としてもつともらしい枠組みを第一義的に提示しつつ、同時にその夢を合わせせる場、あるいは夢合わせそのものの危険性を第二義的にほのめかすような文

言となつて(1)いる。

夢を取られた話であれば定型の他人に聞かせてはいけないという枠組みにひとまず取まるが、夢を取った話であればいわば不可避の状況のもとに夢を強奪したわけだから夢合わせ自体の危険性につながる話ともなる。この組み合わせの親和性は必然とは言えないものの、二通りに分かれた把握はさらに二通りの教訓理解の中に広げられていくのである。

また、もう一例を挙げる。第一九〇話「土佐判官代通清、人違関白殿合奉事」を見ておきたい。

これも今は昔、土佐判官代通清といふもの有り。歌をよみ、源氏、狭衣などをうかべ、花の下、月の前とすきありきけり。(中略)その時、通清あわて騒ぎて、前よりまろび落ちけるほどに、烏帽子落ちにけり。いと不便なりけりとか。
過ぎぬる者は、すこしをこにもありけるにや。

風雅を愛する数寄者の通清は、後徳大寺左大臣から花見に誘われて、喜んでぼろ牛車に乗って出かける。途中で後ろから牛車が来ることに気付くと、その車を左大臣の牛車だと早合点し、後ろを開けて声を上げて呼び寄せる。しかし関白の車であったため、関白の隨身は問答無用で牛車の後ろの簾を切り落としてしまう。慌てた通清は前の方に転がって烏帽子を落としてしまった、という話である。感想にあたる波線部Aに注目してみよう。「不便」を「不憫・気の毒」と考えれば、烏帽子を落とし頭頂部を露わにして哀れな姿をさらした

通清に対する同情的な視点になるであろう。あるいは、この当時の路頭礼に照らして考えれば、牛車から下車することもましてや牛車を停車させることもせずに、礼節を度外視して通清は後徳大寺左大臣に声をかけようとしたことになる。この通清の行動を苦々しく思うなら、失態を咎め立てられてさらに醜態をさらす通清の一連の行動に対して「不便」を「不都合だ・困ったことだ」というように受け止めることもできる。このように受け手の態度に応じて変化するように、決定不能な語彙が据えられるのである。

それに対して末尾の波線部Bでは、行き過ぎた者を咎めるような終わり方となつている。通清の過剰な行為(「過ぎぬる」)について「をこ」と評するが、批判を和らげた「少し」という文言で同情的な「不便」の意に対応する。無礼な行為を厳しく捉える、非難めいた「不便」は、この行為を通清という個人ではなく「好きぬる者」と読んで数寄者全般に敷衍する。「少し」は個別的な異常性を全体に均す表現として据えられることになる。⁽¹⁰⁾数寄者が一風変わつていっているのはしばしば見受けられるが、数寄者全般を否定的に捉えてしまうのも、貴人の横暴を痛感・憤慨する者、あるいは数寄者を好意的に受け止める者がおそらく持つであろう同情的視点から向かうと、いささか突き放した言い方である。「不便」「すきぬる」のこの組み合わせの親和性は必然とは言えないけれども、二通りに分かれた把握に緩やかに応じるように二通りになり得る結語が敷かれていることに注意を向けるべきであろう。

二通りにとれる決定不能な主体が、二通りにとれる決定不能な語彙に支えられている問題が、一話のまとめを兼ねる話末場面に現れ、

頭在化するということになる。主体の決定に曖昧さが残されるとい
う問題が、評語という説話素材に対する語り手のなまの残さば、そ
の評語にあたる部分に含まれる、この点をどのように考えたらよい
のだろうか。ひとまずは、枠組みと表現のズレの両方を今この『宇
治拾遺』の評語は露わにしているといつてもいいだろう。

以上、意味合いを決定する際に第一義的なものとは別の躊躇いが
残される、そのような表現が『宇治拾遺』の評語に見受けられると
いう現象、ならびに二通りの読みを可能にする枝分かれについて確
認した。

三、対と捉える発想

情報・素材の受け渡し、【語り手―情報―受け手】という関係に
あって、伝承とは、一次的な受け手が二次的に語り手に変化してい
くこと、その連続を意味する。情報の追加・削除といった明示的な
部分に限らず、解釈にも必然的にその変化は含まれることになる。
説話集に説話素材が収められるのは、一次的な受け手と二次的な語
り手という同一人物・同一主体が、一次的な語り手と葛藤する場面
でもあるように言える。したがって説話素材には潜在的な複数の語
り手、すなわち多層の解釈が整理されないままに残されるとしばし
ば言われるのである。さらにそれがどのように伝わるのかという受
け手の問題も合わせれば、その多層性は限りない。

『宇治拾遺』における二重性の問題の端緒と言える益田勝美論⁽¹⁾は、
隣り合う話同士の連想を、目的的な利用や主題に直接に関わらない

点にまで認め、作品の編纂・配列原理としてその連想が『宇治拾遺』
の成立基盤となっているということを見通した。そして、緊密な構
成のある種の論点として、次の話を紡いでいく方法として連想とい
うものが捉えられた。二話を一組に考えて隣り合う一話一話に共通
項が常にあるとすれば、二通りの把握に支えられるということにな
る。益田論は、一つの説話素材を複数に切り直していく『宇治拾遺』
の特性を捉えており、ここまでの稿者の主張もその延長線上にある。
さらに語り手・作り手の問題として処理されることが多かった連想
原理を、受け手の問題としての可能性の中に考えようとする論にも
展開された。

話が並べられる際に絶えず新しい連想によって次の話が紡がれる
という仮定に基づけば⁽²⁾、配列・構成に関わる語り手の連想は話をつ
なぐことに働くのだから、原理的に言えば接続面が二つ、前話との
つながり、次話とのつながり、少なくともその二つが必要になる。
該当話を中心に据えれば、前話とのつながりを考える読み、次話と
のつながりを考える二層的な読みがあると見える。とすれば、『宇治
拾遺』は同時に二種の視点を常に抱えるか、あらためて別の視点で
読むかということになり、言うなれば、その読みに基づいて『宇治
拾遺』には二重ないし二回の分裂した語り手が複数にいと仮に想
定できることになる。問題はその二つ目がどの程度に読みや受け取
りに関わるのかということである。連想に基づく捉え方は、そこに
二重の視点が展開され、連想が逆戻りして別の解釈が生まれるとき
に、二重性が露わになるのではないかと思われる。受け手にとって
は、行きつ戻りつしながら連想の逆流が解釈に影響を及ぼすとき、

すなわち連結する¹⁴とき、ようやく明らかかな形でそこに二つ目の読みが表れ、同時に分裂した語り手が登場する。

そこで、解釈の二重性という『宇治拾遺』の特性と、連想の順逆二方向性の側面を、あわせて考えてみたい。問題提起をしておいた「児の空寝」に話を戻そうと思うが、そのために次の話について考えておこう。

第一三話「田舎児見桜散泣事」は第二話と同じ比叡山の稚児に關わる出来事である。見事な桜を風がはげしく散らしている。それを前に涙を流す稚児を目撃した僧侶がそと寄っていつてなだめるが、稚児は桜ではなく田舎の父親の作る麦の花が散ることを嘆いているのだと泣いた。この一連のやりとりをうけて、「うたてしやな」という不快感を表す感想を付して一話を閉じる。

「うたてしやな」に關してはすでに丁寧なまとめがあり、実は解釈上の問題がある。①風流を解さない稚児の田舎じみた反応に対する語り手の非難、②稚児と僧の意識のすれ違いに対するあてこすりの表明、③真剣な稚児の悩みに対して、定型的な思考で慰める僧に対する皮肉。これらの整理をした上で、「一元的に解釈できる根拠がなく、『宇治拾遺』語り手の戦略としてある」¹⁵のではないかとという提起に続く。「うたてしやな」という感想がどこに向けられているかわからない、と同時にそれは決定されないようなある種の企みののだというところで、この見解には同意できる。僧の思惑と稚児の心情のズレが、ここでは問題になっているから、①僧の思惑から外れた稚児に対するもの、②僧の思惑が外れてしまったこと、③僧の思惑の浅さ、それぞれに対しての「うたてし」となり、僧に同調するような

「うたてし」と、僧の失敗に対する「うたてし」というようにまとめ直すことができる。

このような解釈の二重性は僧の行動に対して、僧へ肩入れするか否かといった視点によって左右されることになる。とすれば僧の思惑とは何かという検討が欠かせない。すでに本話に關しても指摘のあるところであるが、寺院における稚児は、僧との間に男色関係を結ぶことでも知られている。こうなると「やはら」そとと近づいていく僧の行為は、ある者にはスマートな博愛主義に見えるし、他の者にはあけすけな下心が透けて見えるのではないだろうか。稚児と僧という一対一の関係に、僧の稚児に対する憧憬の視線をどこまで持ち込むかということであり、さらにそうした僧の思惑自体に対する好悪の感覚もまたこの一話の把握に關わってくる。ただ個人的な感想としては、①のように、田舎のしかも子供を捕まえてきて、都の知識階級に属する側が、都に馴染まぬその価値観を非難するといふのは、稚児に過度の幻想を抱くような偏った見方に思われる。けれども、期待を抱く僧の見方に肩入れすれば、状況は変わるはずだ。さて、第二話ではじめに取り上げた解釈・把握の二重性は、読みの視点の中心をどこに据えるかということであった。その際、「無期の後」に着目すれば、稚児の視点を中心的に設定するのが最善ではないかという第一印象を述べた。「笑ふことかぎりなし」という表現では、いつせいに爆笑したのか、それとも笑いが笑いを呼ぶように哄笑が起きたのかを決定できないから、僧の反応を根拠に僧のいたずら心が第一二話の中で不可欠であるとは言えない。僧のいたずら心が前面に出てくるには、僧に密着した視点、僧自身の視線が受

け手の中にあることが条件となるだろう。なぜなら、稚児の心中に即した一連の表現があつてなおかつその心理的共有に誘惑されないならば、稚児の心情を見透かした立ち位置が必要であるからである。とは言え第一三話の「うたてしやな」の①とつながるなら、僧の稚児への期待と相まってその視線はむげにできない。

また定型的な対応をなじるような③の痛烈さは、子どもを保護の対象と見ない限り出てこない見方だろう。けれどもそれが稚児なら、②と同様に結局は寺院の秩序の中に成立する以上、稚児への憧憬があり、稚児の歡心を買おうとする僧の姿を抜きにすることはできない。つまり、その「うたてしやな」という感想は、僧の思惑を斟酌していく中で、稚児に注がれる熱いまなざしを浮き彫りにするような働きを持っているということになるだろう。この注がれるまなざしを重ねて、もし第一二話に戻ってみるならば、僧視点の話として捉え直すことにもなるだろう。どうやら稚児の視点、僧の視点、僧を見る視点の上に読みが絡み合い揺れるのである。むしろ、それが読みの必然として強制されるわけではない。

第一節での問いかけに戻るならば、次のような説明の順序になる。第一二話の理解はどうやら第一三話の理解ともつながっており、その第一三話の理解は「うたてしやな」という評の受け止め方に表れる。評語において主体や視点に二重性を作り出す作為を認めるならば、解釈のなかなか定まらない「うたてしやな」を配置することは、第一三話理解の多様性を語り手自身が認識しているということと裏返しになる。そしてこの第一三話の「うたてしやな」の多様性は第一二話理解に呼応してくる。したがって、受け手によって解釈が異

なってしまうという問題は、視点の置き所によって解釈が変わることが既に想定されている語り手の問題としてまずは受け止めなければならない、そのような答えである。さらに、「うたてしやな」の理解は第十二話の読み直しを要求するかもしれない。

いまここでは一義的な解釈が決定しにくい中であつて、ある読解のルートを仮想してみよう。第一二話は稚児のほほえましい話、第一三話は梯子を下ろされる僧の下心の話、そしてそのような僧のまなざしが第一二話に浸潤するとき、僧の些細なからかいの話へと揺さぶられるということである。いったん稚児の味わる「無期の後」を理解しながら、僧が稚児を笑う話と捉えるには屈折がある。稚児のほほえましい葛藤の裏に、実は僧の企みがうかがえるということ、それは焦点をずらす中に出てくる読みである。とすると、今のこの順ならば「無期の後」は期待する僧の待つ時間とも重なるものと考えられる。

この話の二重性とは、初めから終わりに単一に進んでいくような連想的発想では捉えきれず、連結的発想によって相互の解釈を揺さぶる中に生じてくるものである。ひとつの話が隣の話に揺さぶられ、二重性が露わになること、『宇治拾遺』ではそこに結語が関わってくるのである。

わかりやすい例を取り上げたい。第一五五話「宗行郎等射虎事」に新羅の国に渡った壱岐国の武者が彼の地で虎退治をやすやすと成し遂げ、日本の兵の勇名を馳せたという話があり、その次の第一五六話「遣唐使子被食虎事」には、遣唐使で中国に渡った人が、子どもを虎に食われてしまった仇討ちにその虎を斬殺し、兵の方面での

日本の評判が高まったという話がある。第一五六話の終わりに「めでけれど、子死にければ、何にかはせん」と兵の評判の無意味さを言う。似たような話が二話並べられているのだから、直前の第一五五話の語の受け止め方も、武勇において他国に比べた日本の優位さを単純に褒めあげるところからの方向の修正、条件付きの称賛に格下げされるなどの修正を余儀なくされる恐れがある。似た筋立てであれば、そこに明らかな導火線をたどって解釈が逆流していくのだから、〈似ている〉へ共通しているという枠組みを設定するか否かが問題となってくる。すなわち、この読みは、何をどう一緒に考えるのか、つなげて考えるのか、ばらばらに考えるのかの問題で、連想の問題と地続きにある。そこに違いがあるとすれば、連続性が明らかであるかそれともおぼろげであるかの差である。このような曖昧な部分について評語・結語が架橋し連結を誘うのである。

一つ一つの話を区切って理解するか、それともひとかたまりの主題で捉えるか、あるいは緩やかなまとまりでとらえるか、それによって内容が変わるということが問題になっている二重性である。『宇治拾遺』の場合で言えば、〈緩やかなまとまり〉で把握する視点によつて、解釈や把握の変更が、これまた緩やかに迫られているということなのである。言わば強制のないスイッチが仕掛けられている。

そして、いまここで再三問題にしているのは、説話素材の把握の仕方が受け手に任されているのではなく、語り手のことば・まとめを起点として把握にズレが生み出されている点である。

四、結語の越境

このように話を対として連結して捉えるか否かは、語り手と受け手の説話素材を挟んだ綱引きになるとも見える。用語の問題で言えば、連想は想像による結合であり、連結は解釈上の結合である。語りの熱情を問題にしたり、連想の共有による漠然とした共感を受け手の中に想定したりすること自体はおかしなことではない。けれども、連想の中につなぐりの強いものを認めて一話単位の解釈を揺さぶるといふ、連結（二話なら対把握）の作為性を明らかにすることもまた、『宇治拾遺』を捉える重要な方法であろう。そこで、起点となる評語の位置が今度のは前の話にある場合を取り上げて連結の問題を考えてみる。

第一八三話「大将慎重」を挙げる。近衛大将に嚴重な慎重が必要だという勸文をうけて、時の右大将実頼はさまざまな祈禱をさせていたが、一方で日頃から祈禱を引き受けていた法藏僧都は、時の左大将仲平から呼ばれないことを不審に思つて事情を尋ねる。自分が嚴重な慎重を行うことは、若き才人であるもう一人の大将によくないのではないか、という仲平の答えに、その心がけならば無事に済むだろうと僧都は戻っていく。自分のことよりも他人のこと・朝廷のことを案ずるその心持が称賛される話と考えてよいだろう。だから、話末のまとめ、評語にある

されば、げにことなくて、大臣に成りて、七十余までなんおは

しける。

は「だから、本当に何事もなくて、大臣になって、七十過ぎまで生きた」と、こうした他者への思いやりと自己犠牲の真心がかえって幸運を呼ぶというまとめとなるであろう。

次話の第一八四話「御堂関白御犬、晴明等奇特事」は、陰陽師の呪詛を道長の愛犬が察知し、陰陽師の晴明に探らせると、犯人の道摩法師を突き止めたが、その黒幕は堀河左大臣藤原顕光であったという話で、末尾にはその悪霊左府の話が付け加えられる。

この両話について、無欲で平安な仲平と貪欲で怨霊化までした顕光が一つの対照として捉えられるとの見解には耳を傾けるべきものと考えられる。本文に明記はされないが、顕光が七十を越える高齢まで命を保ったことは『大鏡』にも言及のある程度の基本的な知識であろう。

そこで老齡が透けて見えるこの二人の対照を前提として、第一八三話の評語を軸にこの両話合わせて眺めてみるどうか。道長以外の登場人物はみな七十過ぎまで生き、そして大臣経験者がそろそろ。第一八四話では二十以上の離れた才人を呪い殺そうとし、怨霊化するほどの人物として顕光の名が明かされるが、この顕光も大臣であつてしかも七十過ぎまで生きていることに思い当たる。こうして評語を軸にして対照した際に生じる違和感は、第一八三話評語の【無欲・畏愛↓出世・長命】という条件式を、第一八四話の【貪欲・殺意↑出世・長命】の逸話の中で崩してしまふ。「されば」以降が導くある種の教訓的方向性は形無しにされてしまふのである。そこに

第一八三話の様相は少なからず変わらざるを得ない⁽²⁰⁾。評語それ自身は定型的で真つ当な文言であるにも関わらず、横並びにされた話をひとつたびつなげてしまふと違和感が噴出する仕掛けがある。混沌とした横並びを創出すること、それはこの評語のいわば反作用によるのである。

この一文を素直に読むと、今回の仲平の「心」によって、凶兆に際し無事に済んだ、それだけではなく、その後の大臣への栄進と長命を得ることができた要因関係を導くように受け止められる。けれども、話中の仲平・実頼が左大将・右大将とされる時期に実際には仲平はすでに左大臣であつたし、仲平たちが生きた時代前後から二百年あまり、欠員が出る前に早世した朝光、濟時くらいを除けば、左大将を経験していれば大臣任官は当然のなりゆきであつた。もちろん、こんな心の持ち主であるからこそ、今回も無事だし、大臣にもなつたし、七十以上に生きたのだという結果論で理解もできるが、第一八三話の評語自身にいささかの隙があり、それが逆に今二話をつなぐ結び目になつていふことを強調しておきたい。

説話集内に矛盾する価値観を有する話が収まることは特別珍しいことではないし、むしろそうした矛盾を解きほぐして別の論理に組み込む中に、統一性が見通されることがある。けれども、『宇治拾遺』では違和感の表面化する肯綮が評語・結語にあるということを再び重視したい。例えば、第一七四話「優婆曇多弟子事」と第一七五話「海雲比丘弟子事」とは僧と色欲の話でひとまとまりに捉えられるが、第一七五話に据えられる「されば世の人戒をば破るべからず」は、訴えかける対象を広げて、破つてはいけぬ戒の種類、そして

表現上浮かび上がる女性の救助・救済との天秤の問題を露わにし、ひとまとまりで捉える姿勢を破綻に向かわせる。

このように、二つの話を対として捉えることによつて、そこに生まれる連結的発想、すわなち共通項を見出して捉えようという発想が、段階的なかたちで解釈に少なからぬ影響を与えることを確認した。この発想はこれまでに検討を加えた二通りの枝分かれを前提すれば、受け手・読み手よりもまず語り手側に用意されたものとする程度想定できるだろう。ある一話の結語が境を越えて、他の話にもかかわるのは、前話をも総括し次話にも展開していくだけではなく、次話から返ってくるという局面にもなるのであった。

五、おわりに

説話素材を目的的に利用するという点で、最も端的であるはずの評語・結語にしばしばズレが仕掛けられているという現象が、表現自身の持つ決定不能性によるものなのか、それとも決定不能性を意識した語り手側に属するものなのか、そうした駆け引きの間に、二重性の問題を考えてきた。この問題は言語遊戯とも深く関連する。隣り合った二話の影響関係を言語遊戯という側面から眺めてみれば、

下の聖、我ばかり尊きものはあらじと、驕慢の心ありければ、
私の憎みて、まさる聖をまうけて、あはせられけるなりとぞ語
り伝ふる。

(第一七三話)

続く第一七四話は、次のようにまとめられる。優婆軻多という聖人が、一人の優秀な弟子に女性に近づくなということを口を酸っぱくして誡めていた。外出した際に川でおぼれる女性に出逢った弟子は、遼巡の末、哀れきのあまり女性を助ける。弟子は、お礼を申し出る女性を草むらの中に引き寄せて押し倒し、事を起こそうとするが、女性を今一度見下ろすとそこには優婆軻多の姿があった。優婆軻多は十分な懺悔をさせて弟子を真の道に導いたという話である。そして、第一七三話の結語を見てみると、上下は違えど、僧が僧を犯そうとする場面、上の聖と下の聖が「合はせられ」る、第一七四話の話のクライマックスに重なっている。こうして、主題以外のレベルで、結語が次話との境を越えていく。

第五三話「狐人二付テシトギ食事」の結語「失せにけるこそ、不思議なれ」とは、第五四話「佐渡国二有金事」で末尾に繰り返される、鉄取りの男が消え失せた不審につながる。あるいは第七話「竜門聖鹿ニ欲替事」の「聖、失せ給ひければ、かはりて、又、そこにぞおこなひてゐたりけるとなん」という結語は、第八話「易ノ占シテ金取出事」で聖ではなく易者が亡くなつてしまつたと代わりにまた同じところで別の者が易占をする話としてつながる。前者は佐渡に金鉱があるとの話、後者は易占が未来を把握するものであるとの話であるから、主題としてつながりがあるわけではない。結語を連想契機として捉えることもできるが、むしろ次話を見据えて予見的に配されたものと考えられるだろう。前話の結語に戻ることで、別の切り口が顔を出してくる。ここに語り手の連想契機があるなら、それは読みの二重の理解に隣り合わせとなる。

二重性を潜在的にはらんでいるという語り手の把握を前提し、連想に着目して双方向性と解釈の変更可能性を論じた。連想とは語り手側の編纂方法であるのみならず、受け手の理解の方法でもある。語り手側が複数の話に連想に基づく接続面を用意することで何が生まれるか、さらにはその接続面をどの程度に受け手側に共有させるのか、それを受け手がどのように受け止めるかといったところに解釈の多様性が生じる。連想には接続面・非接続面があるのだから、対立・同一といった比較から、漠然とした連絡と転換、同化や異化まで多様な受け止め方につながる。連想とは共通項を意識して展開していくだけではなく、共通項を探る連結行為でもあるという観点から、その二重性を考えた。『宇治拾遺』の中では、評語や結語が二重性のスイッチとして機能しているのではないかという見通しを提示し、さらに対把握のきっかけを評語・結語が与えていることを検討した。これは多様性の問題をどこまで語り手側に回収できるかという試行でもある。解釈決定不能という表現レベルの問題と多様性の承認という把握レベルの問題が、語り手に近い次元で回収できるとすれば、そうした作られた駆け引きのあわいにこそ、回収できない、あるいは回収しにくい多様性が広がっていく別の起点があるのだろう。

第一の読みを揺さぶる第二の読みの登場、これが方法的に『宇治拾遺』に認められるなら、たとえば、結語をきっかけに共通項を探知する連結的な仕組みは、他のきっかけから共通項を探る問題に展開していき、さらにその共通項の探索が新しい解釈を見つけていくような永久機関として動き始めるとき、受け手・読み手の参与とい

うものが新しい意味を持つてくるのである。⁽²³⁾
改行以外に区切りのないほんらいの形態を鑑みて、結語が截然と特定の一話にのみ寄与するのみならず、前話、次話を別の切り口から捉える見出しとしても機能しうることを考えた。読んだものを語りに変えて記し留める際のズレが見えているから仕掛けができる、というのはいささか同義反復になってしまいが、収束することばが二重性を拓いていく『宇治拾遺』の中に、〈意味づけ〉に極めて鋭敏である姿を認めて稿を結びたい。

本文引用の資料出典は以下に依った。なお、私意により一部句読点、表記、送り仮名などを改めた箇所がある。『宇治拾遺物語』：新日本古典文学大系、『十訓抄』：新編日本古典文学全集、『曾我物語』：日本古典文学大系。

注

- (1) 田口和夫「宇治拾遺物語新解零拾―第四・七・一二・三八・九五話」(『国語と国文学』84―9、二〇〇七年九月)。菅原利晃「僧たち」は「見」の「そら寝」に気づいていたか。「想像力」を育む古文(『宇治拾遺物語』)の学習指導(『札幌国語研究』15、二〇一〇年八月)の整理は問題点をつかみやすい。
- (2) 野本「宇治拾遺物語と評語」(『国語と国文学』85―7、二〇〇八年七月)で扱った。

(3) 評語は意味づけの色彩の強い説示的なことばを指し、結語は話末評語を包摂する末尾の結びのことばを表すものとして用いた。

(4) 森正人『場の物語論』『宇治拾遺物語の言語遊戯』(二〇一二年九月、若草書房)など。

(5) 野本前掲2論文で部分的に触れた。

(6) 新潮日本古典集成は「たいした」という訳注をつける。

(7) 萬尾和宏『院政期説話文学研究』『宇治拾遺物語』とパロディ(二〇一五年九月、若草書房)にも重なる指摘がある。左表は「人」と「かしこし」の二通りの解釈に従った内容。

【「人に聞かすまじき」の内容関係】

女の存在	かしこし	賢い	恐ろしい
濃い(人:夢解を含む)	夢解を利用される	:主体がまき人	:主体が国司の子
薄い(人:他人)	夢は盗み聞きされる	夢は盗み聞きされる	夢は他言無用

(8) 松尾聰『中古語「ふびんなり」の語意』(松尾聰遺稿集1、二〇〇一年三月、笠間書院)でもこの語の解釈をなかなか決着できないと考える。

(9) 似たような言い回しとして、「男は、上戸一つの興のことにすれど、過ぎぬるはいと不便なる折はべりや」(『大鏡』『道隆』)がある。引用は新編日本古典文学全集による。

(10) 現行の注釈書ではすべて「すぎぬる」であるが、解釈上問題を生じないことを確認するために、「掲出本文を「過ぎぬる」とした。なお同話の『十訓抄』は「すぎぬる者はおくをこの

気のすすむにや」と結ぶが、泉基博『校本十訓抄』(一九九六年三月、右文書院)によれば、諸本は「いたうすぎぬる」とあって、行き過ぎた数寄者という理解がそこにはある。

(11) 益田勝美『益田勝美の仕事1』『中世諷刺家のおもかげ』(二〇〇六年五月、ちくま学芸文庫、初出一九六六年十二月)。

(12) 荒木浩『説話集の構想と意匠』(「次第不同」の物語) (二〇一二年五月、勉誠出版)。

(13) 前者について益田勝美11論文は「複眼的視線」と言い、後者について森正人『場の物語論』『宇治拾遺物語の本文と読書行為』(前掲4著書)は再読という語を用いて読みの重層性について言及する。再読及び再解釈はそもそもその伝承と変転に秘められた、説話の性格とも隣り合わせであるから、これを『宇治拾遺』に限って言うのであれば、再読を可能にする仕組みをさらに問題にする必要がある。この点、竹村信治『宇治拾遺物語の表現』(稲賀敏二・増田欣編『中古文学の形成と展開』中古から中世へ)所収、一九九五年六月、和泉書院)は作られた差異の認識が再読を促すと指摘する。

(14) 連想という語の用途の広さとその行為主体の曖昧さを鑑みて、本稿では連想を背景に有意に話をつなげることを、以降「連結」と称した。

(15) 小島孝之『説話を読み解く——宇治拾遺物語の戦略』(『成城國文學論集』36、二〇一四年三月)。

(16) 竹村信治『言述論——「説話集」』(『説話の言述——説話語りの言語過程』(二〇〇三年五月、笠間書院)に第二三話と絡

めた説明がある。

- (17) 説話集で話を対にして捉えなければならぬ例は多く、その対の捉え方自身も問題になる。例えば、落合博志「『古事談』私注数則」(浅見和彦編『古事談』)を讀み解く、所収、二〇〇八年七月、笠間書院)など、従来の解釈の変更を迫るものとなる。

- (18) 荒木浩「説話集の構想と意匠」(宇治拾遺物語の時間」(前掲12著書)でこうした指摘がなされる。一つの物語世界として捉えることができれば、連想的発想は複線的に効果を有することになる。

- (19) 新編日本古典文学全集に「無欲な仲平の恵まれた平安な老後と権力闘争の確執に敗れて怨霊化した顕光の老後の対照」、新日本古典文学大系に「前話、篤実な仲平は七十余までつつがなく生き延びたが、同じ七十余歳ながら顕光は悲運、老羸の七十余年であった」というまとめがある。

- (20) 兄弟に比べて官途にめぐまれず老境に掛かってようやく大臣就任の念願を果たした、という『大鏡』のような理解を透かして見ても第一八三話の結語は面白いとはいえず、顕光の官歴や境遇もさして変わらない。池上洵一「ある顕光説話の足跡——『江談抄』における説話の「場」の問題——」(『説話論集』1所収、一九九一年五月、清文堂)に指摘のある無才の顕光と、第一八三話の才人実頼を重ねられるなら、注19での理解とは別に、大臣仲平の無才が浮き上がる恐れもある。

- (21) 野本「宇治拾遺物語の改編と指向」(『古代中世文学論考』第

十八集、二〇〇六年十月)。

- (22) 評語・結語の機能不全及びその胚胎は、第二節に見たような主体と語彙の決定不可能な二重性とは別に、前掲森正人4論文で特に第九三話などに指摘されている。

- (23) この発想に従えば、離れた話同士を一定の枠組みにしたがつて結びつけて再解釈するということもあり得、離れた話がつながり、つながった話が崩れていくといった流動性を考えていくことができる。

(のもと とうせい・北海道大学大学院准教授)